

su, Shanghai, Hongjao Road, H. Migo, Jul. 19, 1931). それ以外の Holotype (Kiangsu, Sungkiang 松江, H. Migo, Oct. 17, 1933) を含む 8 枚はゲンノショウコ *G. nepalense* var. *thunbergii* である。したがって原氏の言う *G. wilfordii* の変種は記載されていない新変種になる。

***Geranium tripartitum* Knuth var. *hastatum* (Nakai) Yamazaki, comb. nov.**

Geranium hastatum Nakai in Bot. Mag. Tokyo 23: 101 (1909).

Geranium wilfordii Maxim. var. *hastatum* (Nakai) Hara in J. Jap. Bot. 22: 172 (1948).

Distr. C. Honshu (Nikko).

Hab. Tochigi Pref: Nikko, Chuzenji (J. Matsu-mura, Sept. 27, 1879, Type TI); Yumoto, near Yudaki in shady forests, 1400 m (T. Yamazaki, Jul. 18, 1944, TI; K. Teramoto, Jul. 2, 1947; Ohashi & Murata, Jul. 12, 1977, TI). Gunma pref. Marunuma (H. Asuihama, Jul. 25, 1930, TNS).

***Geranium wilfordii* Maxim. var. *pilicalyx* Yamazaki, var. nov. (Fig. 1).**

Geranium chinense Migo in Journ. Shanghai Sci. Inst. Sect. III, 3: 95 (1935), pro minor parte, excl. holotypo.

Geranium wilfordii Maxim. var. *chinense* (Migo) Hara in Journ. Jap. Bot. 22: 172 (1948) nom. tant.

Calyx adpresso breviter pubescens, cum pillis longis patentibus obsitus.

Hab. Prov. Shantung: Taishan (Y. Yabe, Aug. 30, 1925). Prov. Kiangsu: Shanghai, Hongjao road (H. Migo, Jul. 19, 1931, TI). Taiwan: Prov. Taipei, Pianan (J. Ohwi, Jul. 22, 1933, Holotypus TI, Isotypus TNS).

***Geranium nepalense* Sweet var. *thunbergii* (Sieb. et Zucc.) Kudo, Medic. Pl. Hokkaido: t. 55 (1922)**

Geranium chinense Migo in Jour. Shanghai Sci. Inst. Sect. III, 3: 95 (1935), pro major parte, cum typo, syn. nov.

Geranium wilfordii auct. non Maxim. : Icon. Corm. Sinic. 2: t. 2787, 1972; 江蘇植物誌 (Fl. Jiangxi) 2: 384, t. 1362 (1982).

Distr. Japan, Korea, Taiwan, C. to S. China and Vietnam.

Geranium wilfordii var. *pilicalyx* resembles *G. nepalense* var. *thunbergii*. They are distinguished as follows:

- A. Pedicels generally spreading-pilose; lobes of leaves subacute at apex, teeth obtuse to subacute at apex, leaves generally pentagonal
 *G. nepalense* var. *thunbergii*
- A. Pedicels retrorse-pubescent; lobes of leaves acute to acuminate at apex, teeth acute at apex, lower leaves generally deltoid
 *Geranium wilfordii* var. *pilicalyx*
 (東京大学理学部附属植物園)

ヌルデの学名について (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI : On *Rhus javanica* L. and Its Variety

Rhus javanica L. は 2 枚の標本をもとにして記載されている。その一枚は *Brucea* 属のものであり、もう一枚は *Rhus* 属のものである。Britten (1910) はこの中の *Rhus* 属の標本を Type に選んでヌルデの学名を *Rhus javanica* L. とした。ところが Merrill (1928) は Britten とは無関係に *Brucea* 属のものを Type に選び *Brucea javanica*

(L.) Merrill の学名を作り、ヌルデには *Rhus chinensis* Miller の名を使用した。Merrill の処置は誤りで、ヌルデには *Rhus javanica* L. を使用すべきであることは、村田 源氏が詳しく述べている (植物分類, 地理 36: 173, 1985) ので、ここで繰り返す必要はないが、Merrill の影響は大きく、Flora Cambodge, Laos et Vitenam 2: 182, 1962;

中国高等植物図鑑 2: 632, 1972; 初島, 琉球植物誌, 378, 1975; 雲南植物誌 2: 388, 1979; 中国植物誌 45(1): 100, 1980 等では, 現在でもヌルデに *Rhus chinensis* Mill. を使っているが, これは改めるべきである。

Rhus javanica は葉軸に翼が無くタイワンフシノキに当たる。ヌルデには顕著な翼があり変種として区別される。村田氏はこれにヒマラヤのものをもとにして記載された var. *roxburghii* (DC.) Rehder et Wilson を当てた。どの程度の翼のものからヌルデとするかの解釈だから間違いとは言えないが, Engler (DC., Monogr. Phaner. 4: 380, 1883) は γ . *roxburghii* DC. をごく狭い翼のものに使用し, その解釈が現在でも通用している。中国植物誌では翼の無いものにこの学名が使われている。日本と中国で同じ学名が逆の意味に使われているのは困るので訂正しなければならない。

De Candolle (Prod. 2: 240, 1825) はヌルデの種類に *Rhus semialata* Murray を使用しそれを α . *semialata*, β . *osbeckii*, γ . *roxburghii* の3変種に区別した。後の2変種には記載が無く, 異名だけが引用されている。 γ . *roxburghii* に引用されたネパールの *Rhus amela* D. Don には僅かな翼があると書かれている。しかし, Engler がこの3者を解釈したように, α は翼のほとんど無いもの, β は翼の著しいもの, γ は狭い翼の有るものとして区別したように思える。ネパールには翼の無いものからやや翼の有るものまで様々で区別しにくい。原寛氏等が (Hara and Press in Hara et al., Enum. Flow. Pl. Nepal: 101, 1979) 両者を区別せずに総てを *R. javanica* L. として扱ったのも妥当な処置と思う。日本のヌルデの様な顕著な翼の有るものはタイ, インドシナから中国以東で見られる。var. *roxburghii* 程度の翼のものは, var. *javanica* に含めて扱った方がよいと思う。中国でも翼の有るものと無いものとの間は連続的のようであるが, 翼の無いものは南に, 顕著な翼の有るものは北に偏る傾向がある。日本では翼の有るヌルデは北海道以南, 琉球本島まで分布し, 翼の無いタイワンフシノキは八重山諸島のみで明瞭に区別される。本州でも稀に翼の無いものがあり, ハネナシヌルデ var. *toyohasiensis* Hayashi (林業試

験場研究報告 no. 57: 154, f. 1952) が豊橋付近から報告されている。これは写真で見るとタイワンフシノキに似ている。朝鮮では *Rhus javanica* L. var. *intermedia* Nakai が翼の無いものに相当するなど, 翼の有るヌルデの分布域にも var. *javanica* に相当するものが出てくる。翼の有るものと無いものとの間は連続的で区別の難しいものもあるが, 翼が無い狭い翼の有るものと, 顕著な翼の有るものとは変種関係で区別しておくのが良いと思う。

翼の有るものの変種名としては, Engler の解釈に従えば De Candolle の γ . *osbeckii* が相当する。De Candolle は Engler の解釈のように翼の有るものとして変種名を付けたようであるが, 引用しているものは, Osbeck が中国で採集した *R. javanica* L. と Thunberg の日本のヌルデである。どうして翼の無い *R. javanica* L. をここに入れたのかわからないが, *osbeckii* の変種名からしても *R. javanica* を Type と解釈するほかになく, 翼の顕著なヌルデの学名には使えない。翼の有るものの学名は *Rhus chinensis* Mill. が相当する。これは記載からみても明らかにヌルデである。

Rhus javanica L. var. *chinensis* (Mill.) Yamazaki, comb. nov.

Rhus chinensis Mill., Gard. Dict. ed. 8: *Rhus* (1768).

Rhus semialata Murray γ . *osbeckii* DC., Prod. 2: 67 (1825), p. p. excl. syn. *Rhus javanica* L. (Typus pro γ . *osbeckii*); Engler in DC. Monogr. Phaner. 4: 380 (1833), excl. sym. *Rhus javanica* L.

Rhus osbeckii Decne. ex Steud.: Schneider, Ill. Handb. Laubh. 2: 156, f. 102, d (1907).

Rhus chinensis Mill. var. *chinensis* Mill. ex Rehder in J. Arn. Arb. 20: 416 (1939).

Rhus javanica L. var. *roxburghii* auct. non DC.: Murata in Acta Phytotax. Geobot. 36: 177 (1985), p. p.

Distr. Japan, Korea, C. to N. China, Indochina and Thailand.

Rhus javanica L. was described on the basis of two specimens, belonging to the genera *Brucea* and *Rhus*. Britten (J. Bot. 38: 315, 1910) selected the

specimen of *Rhus* for the lectotype of *Rhus javanica* L. On the other hand, Merrill (J. Arn. Arb. 9: 3, 1928) chose the specimen of *Brucea* for the type of *Rhus javanica* L. and proposed a new name

Brucea javanica (L.) Merrill. This treatment of Merrill should be rejected.

(東京大学理学部附属植物園)

ニュース

ソノラ砂漠の地衣類調査 (1) (柏谷 博之)

Hiroyuki KASHIWADANI: Lichenological Trip to the Sonoran Desert, Mexico (1)

北米大陸の地図を開いて南西部一帯をながめると、ネバダ、ユタ両州にまたがるグレートベースンから南には大小様々な砂漠が発達し、互いに境を接しながら国境を越えてメキシコ合衆国のバハカリフォルニア、ソノラ、チワワの諸州にまで続いていることがわかる。ソノラ砂漠はこの大乾燥地帯の西南部に位置し、シェラマドレ山脈の西斜面を中心にソノラ州からアリゾナ州の西南部、カリフォルニア半島の大部分を含む低地性の砂漠である。また、ソノラ砂漠の東側にはメキシコとアメリカの国境を中心に海拔 1500 m を越える高地性のチワワ砂漠が広がっている。以下の旅行記は 1992 年 5 月 15 日-6 月 15 日に行われた国際共同研究“ソノラ砂漠の地衣類調査”の旅の記録である。ソノラ砂漠の詳しい植生や植物の分類地理に関しては詳しい報告書が出ているのでそれを参照していただくことにし、ここでは数カ国の地衣学者が共同で行った野外調査の雰囲気をお伝えしたいと思う。

旅の始まり

アリゾナ州立大学の T. Nash 博士は 1988 年の夏、ソノラ砂漠の地衣類総合調査のプロジェクトを立案し、積極的に(費用は自分持ちということ)この事業に参加してくれるようにと世界の地衣類研究者に呼びかけた。その当時、私はソノラ砂漠についてはほとんど知識はなかったが、かつて Nash 博士が交換用に使ってくれたソノラ州産の地衣標本を見た記憶は頭の隅に残っていた。中

でも固着地衣のモジゴケに近縁でありながらサルオガセに似た樹枝状の地衣体とリレラ状の裸子器を持つ *Dendrographa* や *Roccella* は、なんとも変わった色合いと形態を持っていたのを鮮明に覚えていたので、そのような地衣類が生えている現地を直接見たいものだとかねがね思っていた。だから、Nash 博士の計画を見た時に「貴兄の計画は興味深いのでチャンスがあれば自分もこの研究に参加したい」という意味の手紙を出しておいたが、その後はこのことはすっかり忘れていた。

1992 年の 3 月になって、Nash 博士から「今年の野外調査に加わってソノラ砂漠の地衣類を一緒に調査する意志はないか」という問い合わせの手紙をもらった。「貴兄の研究しているカラタチゴケ属を中心に調査し、モノグラフを作って欲しい。必要な野外調査は全面的に支援するが、政府から調査資金の援助がもらえるかどうかは今の所わからない」というような内容だった。いささかたよりない誘いではあったが、その頃私は 4 年ほど前から手がけていたブラジルのカラタチゴケ属のモノグラフの研究が一段落して報告書の原稿も書き上げた所だったので、とにかく一度出かけてみることにした。しかし、いざ承諾の返事を書くとなるといくつか困ったことがあった。第一に手紙をくれた Nash 博士とはこれまで一面識もなく別刷りと標本の交換だけでの付き合いなので、未開の地へ長期の調査に一緒に出かけるとなるとちょっと不安がある(これは先方も同じ)こと、調査実施時期はいつになるか? どのような野外調査の形